

【試し読み版】



8

【第VI卷第9章】

## 【第VI卷】

# 9

---

ジンプリチウスのもとを訪れた

〈バルトアンダース〉が、

〈動くもの〉と〈動かざるもの〉を

相手に言葉を交わす術、

その両者を理解する術を手ほどきする

ある日、わたしは森のなかをあてもなく散歩しながら、空疎な心の物思いに耳をかたむけていた。すると目の前に、ふと等身大の石像が横になって転がっていることに気づいたのだが、その彫像はどこか古代のドイツの英雄を思わせる姿をしていた。まさに古式ゆかしい身なりをしたこの像は、古代ローマの兵士の衣装を身にまとい、大ぶりのシュヴァーベンふうの股袋<sup>①</sup>を付け、その全体をわたしなりに判断すると、技の巧みと自然とがすばらしく融け合う見事な出来ばえを示していた。わたしは像の前に立ち尽くし、それをしみじみと観察しながら、いったいどうしてこんな森の奥にこんな立像があるのかと不思議に思っていたが、ふと頭に浮かんだのは、遠い昔この山中のどこかに異教の神

殿があり、この像はそのなかに納められていた神の偶像なのかもしれない、ということだった。

そこでわたしはあたりを見回し、神殿の基礎部分だけでも残ってはいはしないかと探してみたが、その手のものは何も見つからなかった。しかし木樵きこりが忘れていったかと思わせるような、鉄梃子かねてこのごときものが一つ落ちていたので、わたしはそれを拾って元の場所に戻り、この鉄梃子を使って立像を動かし、裏返してみようと考えた。背中の側はどんな造りになっているのか、それを見てみたかったのである。ところが立像の首のあたりに鉄梃子を差し入れ、全体を少し持ち上げようとした瞬間に、なんと像がみずから、もぞもぞと動きだし、やがてこんなことをしゃべりだした

のである。「わしの平安を邪魔するのは何者か。わしは七変化バルトアンダース——」。

わたしはびっくり仰天して腰を抜かしたが、少しして落ち着きをとりもどし、こう声をかけてみた。「たしかにおつしやるとおりだね、あなたはすぐに変わり身をする。つい先ほどまで命のない石の塊であったのに、今や肉体をもつて動いているわけだから。ではふだんのあなたは、いったい何者なのです？　悪魔ですか、それとも悪魔のおふくろさんですか」

「いや、ちがう」と七変化氏は答えた。「そのどちらでもなく、わしは七変化バルトアンダースだ。そなたがわしをそう呼び、わしの本質をとらえたとおりのな。そなたがわ

しのことを知らぬなどということがあろうか。なぜならそなたの人生のいついかなる時も、わしはそなたのすぐ傍にいたのであるから。だがわしは、例えば一五三四年七月の最後の日において、ニュルンベルクの靴職人ハンス・ザツクス<sup>(3)</sup>と言葉を交わしたほどには、そなたとまだ直接に話をしたことは一度もない。だからそなたがわしに一度も気づかなかつたとしても、それは仕方がないこととはいえよう。

だがそなたは、これまでまさにわしの力の作用をうけてきたがゆえに、大きくなつたかと思えば小さくなり、金持ちになつたかと思えば貧乏になり、高く昇りつめたかと思えば地の底に落ち、陽気になつたかと思えば憂鬱になり、悪人になつたかと思えば善人になり、要スルニ<sup>イン・スンマ</sup>何かになつ

たかと思えば、すぐさま別の何かに変わり身をしてきたのだ」

わたしは言った。「あなたの生業がいつもそういうことなのでしたら、今日のところは、もうお目にかかりたくなかったですね」

七変化氏は答えた。「わしの生まれはあの樂園であり、わしの本領は、この現世が在るかぎりずつとはたらきつづける。よってそなたが好ましく思おうと嫌おうと関係なく、生まれ来った土のなかへそなたがふたたび還つてゆくその時まで、わしはそなたの傍から離れることはないのだ」

では人間たちとその行いを種々さまざまに変えていくという、そのこと以外には特に何の仕事もしておられないわ

けですか、とわたしは尋ねてみた。

「ああ、そうじゃな、ないことはない」と相手は答えた。

「わたしは人間たちに一つの技を教えることができる。それを用いるなら、本来は言葉を話さぬあらゆる事物と語り合うことができるのだ。例えば椅子やベンチ、鍋や壺なんぞを相手にな。そういうわけでわたしは、かつてこの技をハンス・ザックスに伝授してやったところが、それでどうなたかにはあの者の本に書かれてあるとおりだ。つまりドウカ―テン金貨や馬の毛皮を相手に、何回かの会話<sup>(5)</sup>を交わしたことが、そこに物語られておる」

わたしは言った。「親愛なる七変化どの、それではその技を、神の助けのもと、わたしにも授けてくださることは

叶いませんか。もしそうしてくださるなら、わたしは生涯、あなたへの感謝を忘れません」

「おお、もちろんじゃ、喜んでそうさせてもらおう」

七変化バルトアンダースはそう答えると、ちょうどわたし(6)が携えていた本を手にとり、続いて一人の書記の姿に変身すると、次の言葉を本のなかへ書きこんだ。

われは始まりと終わりなり。われの生かされぬところはなし——。

スハベ テンノ モスノ ノヤサ ダアメ ニコオ  
モプイ ヲクコ ラリシ ツスギ ニトソ ノツモ  
ノフト ノエカ タルラ イフヲ コオシ ランエ

ソグレ ガリマ コント ノメス ガルタ ニスチ  
カハイ トウシ ンゼジ ランレ ルジナ ランソ  
ナプタ ノリア ホチラ シシキ コムウ キスシ  
ントハ ミイタ サチレ ヨユウ<sup>(?)</sup>

これを書き終えるや、七変化バルトアンダースは巨大なオークの木に変身した。すると次には牝豚に、それからあつという間に焼きソーセージに、さらに唐突にも、どこかい百姓のウンコに——ご寛恕くださいませ——変わり身をした。これで終わりではない。続いて、クローバーの園に、そしてこちらが落ちつく間もなく、今度は牝牛の糞に、そして美しい花や小枝に、そして桑の木に、そして美しい絹

織りの絨毯に、といったふう<sup>(7)</sup>に次つぎと姿を変えていくのである。

やがて七変化氏はふたたび人間の姿に戻ったが、この光景のなかでは、先のハンス・ザックスが作品で書いているよりもずっとたくさんの姿かたちが入れ替わって現われた。これほどにも慌ただしい、まさに八面六臂の変身のさまは、オウイデウス<sup>(9)</sup>の本でも、また別の本でも読んだことがなく——ちなみに例のハンス・ザックスの書物は、その頃のわたしはまだ開いて見たことがなかったのである——、これはもしや、古代のプロテウス<sup>(10)</sup>がふたたび冥界から蘇り、その幻惑術でわたしを誑かそうとしているのでは？ あるいは、もしかして悪魔みずから眼前に現われ、隠者である

わたしを試みにかけ、ペテンにかけようとしているのでは？ などと思つて不安になつた。

すると七変化氏は、わたしにこんな話を聞かせてくれた。自分の一族の紋章には月の図(11)があしらつてあり、これはトルコ皇帝よりもつと正統な誉れに基づくものであること、揺らぎこそが彼の落ちつく場所であり、安定は最大の宿敵であること、だが七変化氏は、この安定を齒牙にもかけておらず、なぜならけつきよくいずれ安定は、この七変化氏の傍らから逃げ出していくものなのだから、といったことである。この説明の後、一羽の鳥に変身した七変化氏は、そこからまたたく間に飛び去つた(12)。わたしはそれをただ見送るばかりだつた。

わたしは草の上に座りこみ、七変化バルトアンダースが残していったあの不思議な言葉を思い浮かべて物思いにふけた。そして七変化氏からわたしが学びとるべき技を、何とかしてそこから導き出そうとしてみたのである。しかしわたしには、あの言葉をあからさまに口に出す勇気が出なかった。なぜとってそれは、悪魔祓い師たちが地獄の悪霊を操ったり、いろいろな魔法をやったのけたりする時に唱える、例の怪しい呪文とそっくりだったし、またきわめて珍妙な、つまりはドイツの誠実さと相いれない、意味不明なものに思われたからである。わたしは独り言ごちた。

「あれを口にしたとたん、どんな魔女の化け物が出てくるものやら、知れたもんじゃない。あのバルトアンダー

スとやらも、実はサタンなんじゃないのか。ああやっておまえを試練にかけているわけだよ。昔の隠者たちがどんな辛酸をなめさせられてきたか、おまえもよくわかつてるはずだろう」

ところがである。わが身に具わる好奇心は実に根深く、その促しのままにわたしは、本に書きこまれたあの言葉をそれから後もずっと見つめつけ、物思いに沈んでいた。というのもわたしは、そもそも言葉を話さぬものたちと会話ができたらどんなにいいだろう、と常づね思っていたくちであったし、それに実のところ世間にも、理性なき動物たちと意志疎通をする人たちがいるという噂を聞いていたからである。こうしてわたしは、時が経つにつれてますます

すあの言葉に熱中していった。自慢ではないが、わたしは暗号解読や文字の判読のかんりの達人であつて、おそらく誰も意味を読み取つたり、推測したりできないような手紙文を、一本の糸や髪たやすの毛のうえに書き記す、といった技術も、いとも容易くやつてのけた。おそらくは「ヨハネス・トリテミウスの秘文字」ステガノグラフィ<sup>(14)</sup>と思われる暗号文字を、みごと解読してみせたのも、とつくの昔のことである。

そういうわけで、この七変化氏の文字をわたしはそういう目線で見ると、うしろめ、まもなく判明したのは、バルトアンダースはわたしに、実際の姿においてだけでなく、まさに古き良きドイツの言葉を用いて、しかもわたしが思いこんでいたよりもはるかに誠実な心から、彼の秘術をわた

しに伝授してくれていた、ということであった。このことにすっかり満足したわたしは、しかしこの新しい智慧にこれ以上関わることはせず、自分の住まいに戻り、それから後は、昔日の聖人たちの物語を読みふけた。人里離れた場所で暮らすわたし自身を、よき模範の数かずを思い浮かべることで霊的に高めたいという思いからであったが、まあ単なる暇つぶしとして、というのも正直なところではあった。

〔訳註〕

(1) 原語 Schwaben-Latz の Latz は体の前面を覆う「胸着」ともとれるが、同じ近世の資料であるホルバイン作のヘンリー八世の肖像画（一五三七  
年頃）をもとに、股間を守りつつ、そこに裝飾性を与えたコッドピース  
と解しておく。男性性の強調としての意味があり、「ドイツの英雄」と  
いうイメージにも合う。

(2) 原語 Baldanders は、「たぐじ」(bald) 姿が「異なる」(anders) もの  
へ変身するという寓意的な名前をもった怪異の名。J・L・ボルヘス『幻  
獣辞典』にも詳しく紹介される（河出文庫版の邦訳二二三―二二五頁を  
参照）。なおボルヘスの叙述には、本小説の冒頭扉絵における、あのサ  
テュロスのごとき怪物もまたバルトアンダースの一つの姿であるかのよ  
うに読めるところがあり、作品全体の統一的な読み方としてそれは興味  
深いものではあるが、小説本文の内容に厳密に即すかぎりは首肯しがた  
い。研究者 Gersch (S.3) も扉絵の徹底した検討のなかで否定的な見解を  
述べている。

- (3) ドイツ南部の帝国自由都市ニュルンベルクで活動した靴職人、職匠歌人(一四九四—一五七六)。十七世紀においてこの詩人をグリーンメルスハウゼンほどに積極的に評価する例は稀れ。バルトアンダースの創案はザックスの韻文物語『われは全世界に名を知られたる、バルトアンダースという者なり』(一五三四年)と対話文学『フィロソフィアと悲しみに沈む憂鬱なる若者との対話』(一五四七年)の二作品から。
- (4) 校訂者 Breuer によれば、好奇心(*curiositas*)とキリスト教の関わりを問う本作において、この箇所は創世記2, 17; 3, 1-7における認識の木とその果実の記述を暗示するという。
- (5) バルトアンダースの元案を提供した先述のH・ザックスによる二つの韻文物語『失われたる物語りするグルデン金貨のこと』(一五五三年)『哀れにも嘆きこぼす馬の毛皮』(一五五七年)を指す。
- (6) 校訂者 Breuer によれば、これは本章末尾に言及される「昔日の聖人たちの物語」、すなわち聖人伝の書物を指すか、もしくは当時の大学生が指導を求めて訪問した先達から格言などを記入してもらった一種の記念帳(*Stammbuch*)を指すものと推測される。

(7) 「われは始まりと終わりなり。われの生かされぬところはなし」という冒頭の言葉を文字どおりにとれば、各単語の始めと終わりから、下記の文章が浮かび上がる。すなわち「すべての物のさだめに思いをこらし、次にその物との語らい *Discuits* をこしらえ、それがまことの姿に近いと信じられるなら、そなたの阿呆らしき好奇心は満たされよう」と。そうした「語らい」*Discuits* の一例がさつそく次章で展開される。「へ便所紙」シエルメツサー」との対話である、とする先行研究もある。

(8) 校訂者 Breuer によれば、柏の木の実は豚の餌になり、その豚からソーセージが作られるという流れで、この一連の列挙には、純然たる自然の領域から人間の技術と文化の領域への事物の変転が示されているという。

(9) 帝政ローマ期の詩人プリウス・オウイディウス・ナソ（前四三―後一八）。ギリシャ・ローマ神話における変身譚の総覧とすべき『変身物語』のほか、数々の恋愛詩の作者としても知られる。近世ヨーロッパにおいてはギリシャ・ローマ神話の最大の典拠となる。

(10) ギリシャ神話における海の神。予言と変身の能力をもつ。

- (11) 半月としてはオスマン・トルコ帝国の象徴であり、月の女神ルナとして移ろいやすさ、変転の象徴となる。
- (12) 校訂者 Breuer によれば、先の自然から技術へという流れが、ここでは逆向きにされるといふ。
- (13) 「聖アントニウスの誘惑」の主題に代表されるような隠者、修道僧への悪魔の攻撃のこと。
- (14) ドイツ中西部シュポーンハイムの大修道院長ヨハネス・トリテミウス(二四六二—一五一六)は、魔術師としても名高く、同時代の錬金術師ファウスト博士とも気心を通じ、後のアグリッパ・フォン・ネットスハイムやパラケルススの師とも言われる。霊界と交信するための秘密文字の創案者と見なされていた。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・  
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その⑧

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年四月五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。  
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>